

# 家庭におけるしつけの実態と 学校教師の実態認識とのズレに関する実証的研究

長 田 勇・前 嶋 元・高 林 直 人・桜 井 誠

## The Empirical Research of the Difference between the Realities of Home Trainings and the School Teachers' Recognizing of Them

OSADA Isamu, MAEJIMA Gen, TAKABAYASHI Naoto, SAKURAI Makoto

キーワード：しつけ、叱る、ほめる、信頼感、モデル、認識のズレ

### I 調査の目的と内容

#### 1 しつけとは何か

「しつけ」とは何か？ 子どものある行動を否定し、あるいは、ある行動を肯定することによって、子どもに日常行動のあり方を示唆する親の行為である。

「否定する」とは禁止命令を発信することであり、おもに「叱る」行為がこれにあたる（「やめなさい」とやんわりと注意するのも禁止命令ではあるが、調査では「叱る」に含めないこととした）。「肯定する」とは支持・推奨・承認・受容のメッセージの発信であり、おもに「ほめる」行為がこれにあたる（「それでいいんだよ」などの是認も含む）。したがって、「叱る」「ほめる」行為の詳細を調べることで、家庭における「しつけ」のおおよその傾向は把握できる。

もちろん、親の意識としては、「叱る」と「ほめる」だけが「しつけ」に当たるわけではない。子どもの行動が否定すべきことであっても、しばらくはじっと黙ってようすを見ていることも「しつけ」の一環であろう。自己修正の時間を与えることによって、自律を促しているのである。肯定すべき行動であっても、むやみにほめないで見守

る、ということも「しつけ」の一つとして親は意識しているかもしれない。子ども自身が行動の結果を認識することによって社会を知っていくのも自律化への道程だ、と思うからであろう。

また、親子でテレビを見ながら、テレビに映る何かの事件について親がコメントするのも「しつけ」の範疇に入るだろう。事件の中のだれかの行動は社会的には許されないということを熱っぽく語れば、社会の中で何が通用して何が通用しないのかを親が子どもにレクチャーしていることになりうる。親がいわゆる「背中を示す」ということも「しつけ」のうちであろう。

しかし、それらの親の意識は子どもには見えない。自分の行動への否定や肯定のメッセージが明示されなければ、子どもは逆の意味に受け取ることもありえるし、親は自分に無関心であることとらえるかもしれない。事件へのコメントも、自分には無関係なことと受け流すこともありえる。つまり、メッセージがなければ、親の「しつけ」意識は子どもには伝わらない、ということの可能性はあるのだ。

したがって、われわれは、メッセージの明示性を「しつけ」の指標とした。それが「叱る」と「ほめる」である。

二つ、付言しておく。

① 親以外の人「しつけ」行為はありうるが、日常行動の「しつけ」は基本的に家庭でなすべき

ことなので、本稿では親に焦点を当てることにしている。家庭の中の祖父母が孫をしつける場合はあろう。しかし、それは、親のなすべきことの代理行為あるいは補完行為と見るべきである。例外はあるだろうが、一般的には「しつけ」の主体はあくまでも親である。

② 親の行動を見て、子どもが密かに見習う、ということもある。ところが、これは子どもの意識であり、親は気づかないこともある。つまり、その点においては親に「しつけ」意識がないともいえる。しかし、「見習う」というのは、子どもが積極的に親に同化することを指すので、これは重要である。したがって、調査項目に加えている。

## 2 調査目的

2000年に長田は「子どものしつけに関する世代間比較調査」を実施した(5000人規模の調査。2001年日本教育学会発表。2006年3月文部科学省科学研究費補助金基盤研究C1研究成果報告書「学級担任『持ち上がり』慣行の成立・崩壊と学級経営観に関する実証的研究」所収論文「世代間比較調査『少年の世界』—学級編成を考えるための前提状況—」を参照されたい。以下、この調査を「2000年調査」と呼ぶ)。

当時(それ以前からも)、「最近の親の教育力は低下した」という世論が高まっていた。その誤りを指摘した発表であった(「教育力」という用語が広く使われていたが、具体的には「日常行動のしつけ」に関する親の行動力のことを指すのが一般的であった。たとえば、「最近の親は子どもを叱らなくなった」「子どもに甘くなった」「過保護である」などのことを指していた。したがって、その2000年調査では「教育力」を「しつけ力」と同値のことととらえて調査した)。

今回の調査(2012年7月から10月実施)は、第一に、その2000年調査の主要部分を追試すること、第二に、親のしつけに関して学校教師がどう認識しているかを検討すること、の二つを内容としている。

この調査により、(1) いまの親は子どものし

つけに努力していて、祖父母世代よりも子どもからの信頼を得ており(2000年調査と同傾向であり)、(2) その実態と学校教師の実態認識とのあいだにはかなりのズレがある、という仮説を実証する。この実証によって、今後の学校の生徒指導(生活指導)に対する基礎資料を提供することになる。これが本調査の目的である。

## 3 調査内容

### (1) 調査対象

① 調査対象の選定手順はつぎのとおり。

(i) 全国を東北地方、関東地方、……九州地方の7地方に分け、それぞれの人口比に応じて各地方から2～4都府県を無作為に選び、計20都府県とする。

(ii) 全国学校データ研究所編『全国学校総覧 国公立編 私立編 2013年版』(原書房)から各都府県の学校数に応じて乱数表により無作為に計1000校の小学校と中学校(各500校)を抽出する。

(iii) 調査協力の依頼書を各校に送付する。「最近の親の教育力は低下した」という世論が下火になったせいか、わずかに小学校3校(栃木、高知、鹿児島)と中学校2校(神奈川、長野)が調査協力に応じた。

(iv) その計5校に調査票を送る。結局、家庭におけるしつけの世代間比較調査としては、児童(総計214人)、生徒(総計282人)、および、児童生徒と同居している父母祖父母(回答数が対象者数で、総計697人)の1000人超の規模となった。ならびに、学校教師の実態認識の調査としては、当該学校の教師全員(総数132人)を対象とした。

比較的小規模の調査であるが、前回の2000年調査の追試としては1000人超の規模で十分であり、教師の調査としても、全体の傾向が結果的に一定しているので、これで十分と判断する。

② 有効票数：小学5年205(回収率95.8%)、中学2年194(同68.8%)、父親222(平均年齢43.6歳)、母親296(同41.6)、祖父76(同71.4)、

祖母 103 (同 67.3)、教師 85 (回収率 64.4%)。

## (2) 調査項目

家庭のしつけに関しては、「叱る」「ほめる」を中心とし、児童生徒と父母祖父母の子ども時代の質問項目は同一内容(ただし、父母祖父母あての質問項目は過去形表現。各自の少年期の記憶を回答)。親としての行動については、父母祖父母で同一内容(祖父母あては過去形表現)。

この調査の特徴は、一世代あとの回答が一世代前の回答の裏づけになる、というように「裏をとる」という点にある。裏がとれていれば、回答の信憑性が保証されることになる。

なお、たとえば「よく叱られた」と「ときどきは叱られた」のような頻度の認識は厳密であるとは言えないので、集計結果については「叱られたほう」あるいは「叱られなかったほう」に二分して検討することとした。他の設問も同様。

## (3) 調査方法(質問紙、託送調査法)

①調査協力校を通して質問紙(調査票、一大家族分)を各児童生徒に配布し、児童生徒と父母祖父母は家で回答を記入して、一大家族分をまとめて厳封し学校に提出。それを学校が調査者に返送(教師は開封できない仕組みになっている)、という手順(子どもの一部は学校で回答しているところもある)。

②教師に対する調査は、調査票を学校に送り、各教師が回答を記入し、家族調査とともに調査者に返送、という方法。

③家庭のしつけに関する世代間比較調査の方法の妥当性

三世代に同一質問に答えてもらう方法である。質問内容は、祖父母世代には、自身が父母として子どもをしつけていたころのことと自身の子ども時代のこと、父母世代には、子どもをしつけているいまのことと自身の子ども時代のこと、子ども世代には、しつけられているいまのことへの質問である。表現には現在形と過去形の差はあるが、内容は同一である。

とくに祖父母世代の場合はすべて何十年も前のことを尋ねる項目であり、父母世代の場合でも半

分は何十年も前のことを尋ねているので、記憶に基づく回答では結果の信憑性を疑う人が出てくるかもしれない。したがって、方法の妥当性についてあらかじめ答えておく(2006年の前掲論文ですでに説明していることであるが、加筆して再述する)。

(i) 歴史学において「オーラル・ヒストリー」という方法が近年注目されている。人の記憶に歴史資料性を讀んだ方法である(トンプソン『記憶から歴史へ』青木書店2002など)。本研究方法はそれと発想が近似する。数十年前のこの記憶であっても、当事者としての過去の自分が問われることがらについての記憶はかなり安定しているものだ。2000年調査でも実証済みのことである。

(ii) 何ごとについても人は自身の記憶に基づいて行動し議論する。「最近の親はダメになった」などの議論も、昔といまについての論者個人の記憶が資料になってなされる。しかし、「ダメになったと思いますか」というような印象を問う質問では、身近なところで目につくことがらの記憶に意識がとられた印象批評になりがちで、実際に自分はどうであったのかとの冷静な比較がなされない傾向になってしまいかねない。だから、本調査は、たとえば祖父母世代に「では、あなたはかつて実際にどうであったのか？」を問うのである。他者の行動についての印象を問うのではなく、本人自身の実際を問うのである。記憶に基づいて当事者としての実際を申告する、というのがこの方法の前提である。

もちろん、数人の記憶だけでは昔の実態は判断できない。互いの差がある程度は出るからである。しかし、記憶を何十、何百、何千人分も集めたらどうなるか? 記憶の大集合体だから、かなり精度の高い資料となりうる。しかも、上の世代が子どもになしたことは下の世代が子ども時代に受けたことであるから、両者の間の数値にかなりの開きがないなら、上の世代のなしたことがらの傾向は実証されることになる。この調査方法の重要な点は、前述のとおり、結果としてそういう裏づけがなされるかどうかということにある。

(iii)「それは実態を示すものか？ 各世代の意識を示すものではないか？」という批判があるかもしれない。「実態」と「意識」の二分法に基づく批判である。これは根本的に筋ちがいである。

あらゆる実態は人の意識の中にある。意識を離れて実態が自存するのではない。たとえば、殺人事件があったとしよう。物理的な証拠もそろえば、容疑者は逮捕される。容疑者が「たしかに殺した」と殺人を認めたとしても、実は、容疑者は犯人として「推認」されただけである。本人も意識の中で犯人であることを認めているにすぎない。警察や本人の意識を離れて「犯人」であることが物理的にどこかに現れているのではない。指紋その他の物理的証拠は、そういう意識の確かさを推認するデータであるにすぎない。つまり、物理現象以外はすべてが意識の中にあるのだ。

では、なぜ「家庭におけるしつけの実態」と言うのか？「しつけ意識」でもいいのではないか？

ちがう。(ii)で述べたとおり、「自分自身の実際」を尋ねているからである。「意識」ということは広い意味で使われることがあり、たとえば「最近の親は子どもを叱らなくなったか」とか「最近の親は子どもを叱らなくなったか」とか「意識」調査と呼ぶことがある。そうではなく、実際のことを自覚化してもらうので、その集合体はまさに「実態」というにふさわしい。

なお、本論では、調査内容のすべては扱わない。最後に紹介しているアンケート調査票のうちの主要部分にとどめる。焦点を絞った論構成にするためである。

(長田、前嶋)

## II 家庭におけるしつけの実態（子どものしつけに関する世代間比較調査）

本章では、家庭におけるしつけの実態を明らかにしていく。なお、本章に示す調査結果は2000年調査の主要部分の追試であり、前回と今回の傾向についても比較していく。以下の統計は、すべ

て「危険率1%」でカイ二乗検定済みである。

### (1) 最近の親は子どもを叱らなくなったか

〈祖父母、父母、子どもへの質問：いずれも内容としては同じ。母親への質問を代表としてつぎに示す。以下同様〉

「あなたは、子どもの頃（幼児期から14歳あたりまでの間で）親によく叱られましたか。おこられた、きびしく注意された、というようなことがあったかどうかで考えてください。①父親には…1.よく叱られた 2.ときどきは叱られた 3.あまり叱られなかった 4.まったく叱られなかった 5.その他 ②母親には…(同)」

(表1) 子どもの頃 父親によく叱られたか

	1.よく叱られた	2.ときどき叱られた	3.あまり叱られなかった	4.まったく叱られなかった	総数(人)
祖父母	7.0%	24.6%	47.4%	17.5%	171
父母	14.8%	41.6%	34.1%	6.8%	513
子ども	16.7%	40.8%	30.8%	8.2%	390

(5.その他は省略)

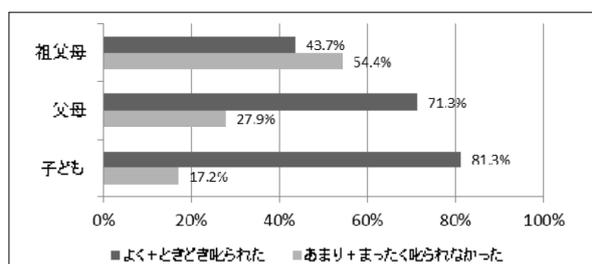
(表2) 子どもの頃 母親によく叱られたか

	1.よく叱られた	2.ときどき叱られた	3.あまり叱られなかった	4.まったく叱られなかった	総数(人)
祖父母	8.1%	35.8%	38.2%	16.2%	173
父母	24.6%	46.7%	24.6%	3.3%	512
子ども	29.9%	51.4%	13.9%	3.3%	395

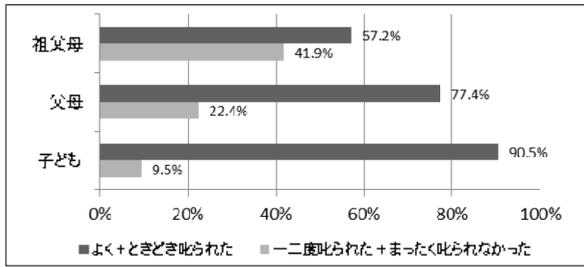
(5.その他は省略)

上記の1・2「よく叱られた+ときどき叱られた」と3・4「あまり叱られなかった+まったく叱られなかった」をそれぞれ合計して世代間の比較をしてみたのが下のグラフである。

(図1) 子どもの頃 母親に叱られたか（今回調査）



(図2) 子どもの頃 母親に叱られたか (2000年調査)



子どもの頃「母親に叱られたか」の結果を今回調査(図1)、前回調査(図2)で比較すると、全体的な割合には多少の差が見られる。「よく叱られた+ときどき叱られた」の合計は、祖父母世代で13.5ポイント、父母世代で6.1ポイント、子ども世代で9.2ポイント、前回よりそれぞれ減少している。しかし、いずれにおいても、祖父母、父母、子どもと世代が低くなるにつれて、叱られた傾向が強くなっている。つまり、昔の親より現在の親のほうが子どもをよく叱っている実態が見とれる。父親についても同じ傾向である。

ただ、これは「叱られた」ということについて問うものであるので、「叱った」かどうかを見なくてはいけない。つぎに示す。

〈祖父母、父母への質問〉

「あなたは、自分の子どもを(幼児期から14歳あたりまでの間で)叱ることがありましたか。

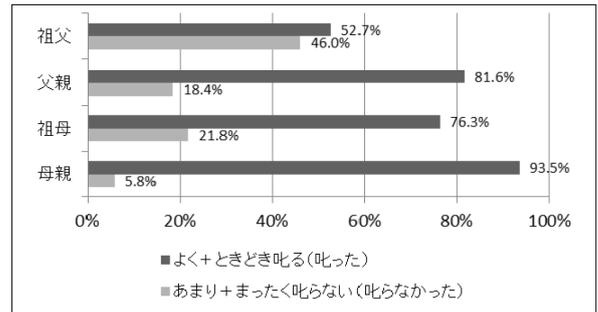
1. よく叱る(叱った)
2. ときどき叱る(叱った)
3. あまり叱らない(叱らなかった)
4. まったく叱らない(叱らなかった)
5. その他

(表3) 自分の子どもをよく叱ったか

	1. よく叱る(叱った)	2. ときどき叱る(叱った)	3. あまり叱らない(叱らなかった)	4. まったく叱らない(叱らなかった)	総数
祖父母	5.3%	47.4%	42.1%	3.9%	76
父親	23.4%	58.2%	15.6%	2.8%	218
祖母	21.8%	54.4%	20.8%	1.0%	101
母親	49.3%	44.2%	4.8%	1.0%	294

(5. その他は省略)

(図3) 自分の子どもを叱ったか

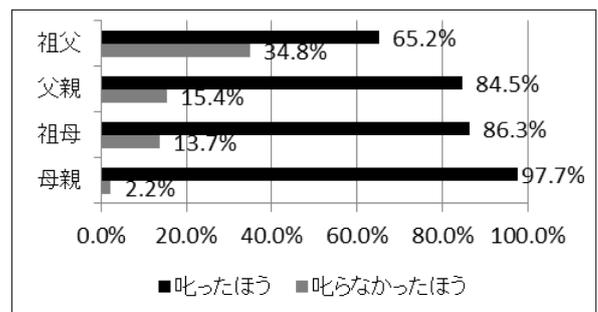


「叱った」ことについても、1・2「よく叱る(叱った)+ときどき叱る(叱った)」の合計を比較すると、祖父の52.7%に対して父親は81.6%、祖母の76.3%に対して母親の93.5%と、祖父母世代よりも父母世代のほうが子どもをよく叱っている、という実態がわかる。

前述の「裏づけ」はどうか? 図1の「母親に叱られたか」で、「叱られたほう」は父母世代71.3%(A<sub>1</sub>)、子ども世代81.3%(B<sub>1</sub>)、図3の「叱ったか」では、「叱ったほう」が祖母76.3%(A<sub>2</sub>)、母親93.5%(B<sub>2</sub>)であった。A<sub>1</sub>:B<sub>1</sub>の値(0.876)がA<sub>2</sub>:B<sub>2</sub>の値(0.816)にぴったり一致するはずもないので(叱った人と叱られた人が親子ではない場合も含まれるので)、この程度の差はとうぜん生ずるが、値の傾向は一致しているといえる。「叱られなかったほう」と「叱らなかったほう」の対応関係もほぼ同様である。つまり、裏づけができていないと見ていい。

この項目について、前回調査ではどうであったか。グラフで示す。

(図4) 自分の子どもを叱ったか (2000年調査)



今回調査とほとんど同じ結果が出ていた(回答数: 祖父181、祖母270、父親1098、母親1237)。

(2) 最近の親は子どもをほめているか

〈祖父母、父母、子どもへの質問〉

「あなたは、子どもの頃（幼児期から14歳あたりまでの間で）親から何かでほめられたことがありましたか。①父親からは…1.よくほめられた 2.ときどきほめられた 3.あまりほめられなかった 4.まったくほめられなかった 5.その他 ②母親からは…（同）」

(表4) 子どもの頃 父親によくほめられたか

	1.よくほめられた	2.ときどきほめられた	3.あまりほめられなかった	4.まったくほめられなかった	総数
祖父母	5.6%	46.9%	35.8%	7.4%	162
父母	6.9%	43.4%	36.7%	10.2%	509
子ども	26.8%	52.8%	13.1%	5.2%	388

(5.その他は省略)

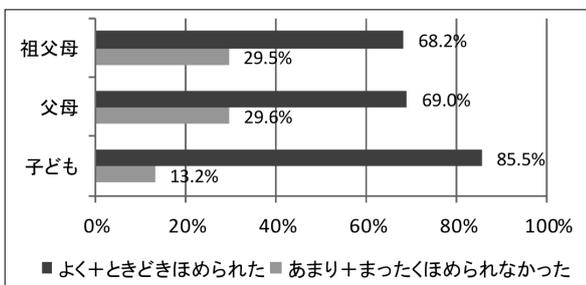
(表5) 子どもの頃 母親によくほめられたか

	1.よくほめられた	2.ときどきほめられた	3.あまりほめられなかった	4.まったくほめられなかった	総数
祖父母	15.6%	52.6%	24.9%	4.6%	173
父母	12.1%	56.9%	24.5%	5.1%	511
子ども	38.9%	46.6%	10.9%	2.3%	393

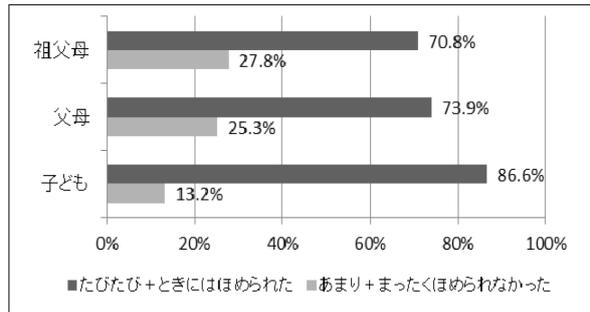
(5.その他は省略)

いまの子ども世代のほうが前世代よりも圧倒的に多くほめられている、という実態が見える。2000年調査でも同じ結果が出ていた。その一部が下記の図である。

(図5) 子どもの頃 母親にほめられたか (今回調査)



(図6) 子どもの頃 母親にほめられたか (2000年調査)



(祖父母 414、父母 2278、子ども 1352)

「ほめられたほう」「ほめられなかったほう」ともに、13年前の調査と数値がほとんど同じである。この十数年の間に目立った変化はなかったということである。

〈祖父母、父母への質問〉

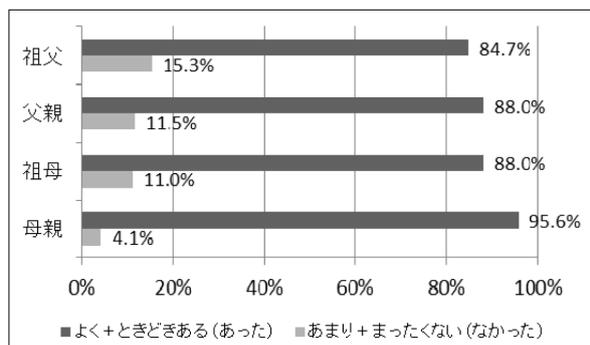
「あなたは、自分の子どもを（幼児期から14歳あたりまでの間で）何かでほめたということがありますか。1.よくある（あった） 2.ときどきある（あった） 3.あまりない（なかった） 4.まったくない（なかった） 5.その他」

(表6) 自分の子どもをほめたか

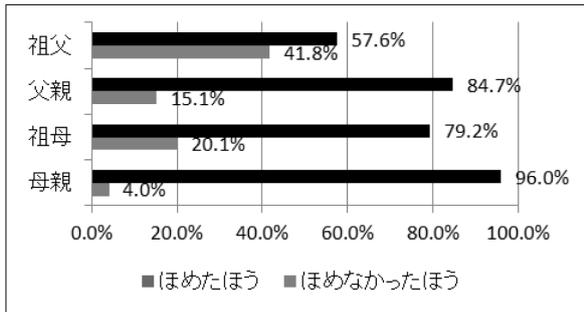
	1.よくある(あった)	2.ときどきある(あった)	3.あまりない(なかった)	4.まったくない(なかった)	総数
祖父	12.5%	72.2%	13.9%	1.4%	72
父親	28.0%	60.0%	11.5%	0.0%	218
祖母	30.0%	58.0%	10.0%	1.0%	100
母親	47.4%	48.2%	3.8%	0.3%	289

(5.その他は省略)

(図7) 自分の子どもをほめたか



(図8) 自分の子どもをほめたか (2000年調査)



(祖父 177、祖母 264、父親 1098、母親 1229)

「ほめられた」または「ほめた」という回答も、「叱られた」または「叱った」ほど顕著ではないが、世代が低くなるにつれて割合が増えていく。ここでも、現在の親のほうが子どもをほめる傾向にあることがわかる。

2000年調査の結果は図8のとおりであり、祖父母世代よりも父母世代のほうが子どもをほめている傾向が強い。今回調査の「よく+ときどきほめる」について、祖父と祖母の平均値は86.4%、父親と母親の平均値は91.8%である。2000年の祖父母は、現在の祖父母の一代上であることを考えると、年代が下がるにつれて子どもをほめる傾向が強くなっているといえる。

### (3) 最近の親は子どもの信頼を得ているか

〈祖父母、父母、子どもへの質問〉

「あなたは、小・中学生の頃、親を見習った(あるいは見習おうと思った)ということがありますか。①父親については… 1.よくあった 2.ときどきあった 3.あまりなかった 4.まったくなかった 5.その他 ②母親については… (同)」

(表7) 父親を見習おうと思ったか

	1.よくあった	2.ときどきあった	3.あまりなかった	4.まったくなかった	総数
祖父母	20.1%	40.3%	27.7%	8.8%	159
父母	11.0%	37.1%	32.9%	17.2%	501
子ども	20.2%	42.7%	25.1%	10.7%	382

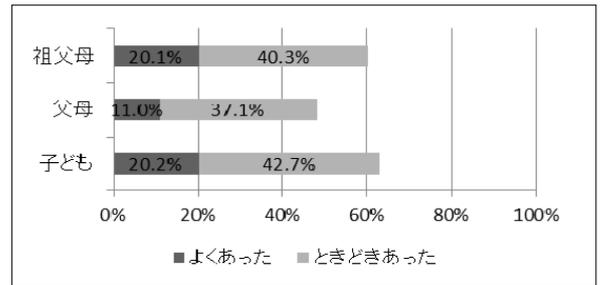
(5.その他は省略)

(表8) 母親を見習おうと思ったか

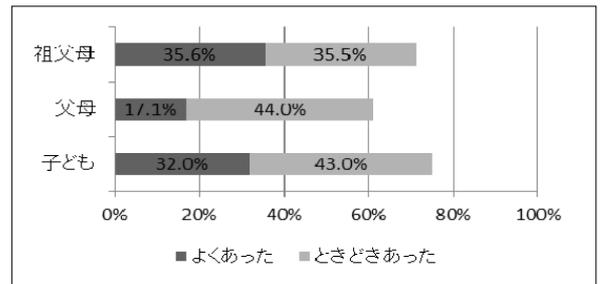
	1.よくあった	2.ときどきあった	3.あまりなかった	4.まったくなかった	総数
祖父母	35.6%	35.5%	19.9%	6.6%	166
父母	17.1%	44.0%	26.6%	10.3%	504
子ども	32.0%	43.0%	17.3%	6.4%	388

(5.その他は省略)

(図9) 父親を見習おうと思ったか

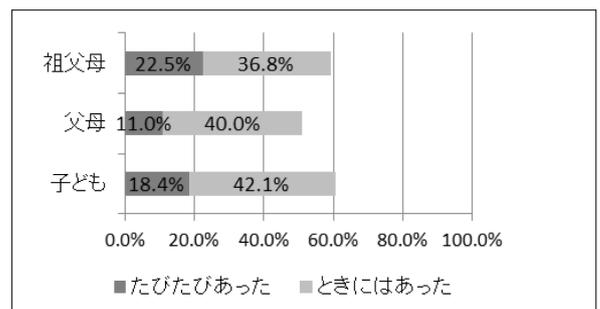


(図10) 母親を見習おうと思ったか



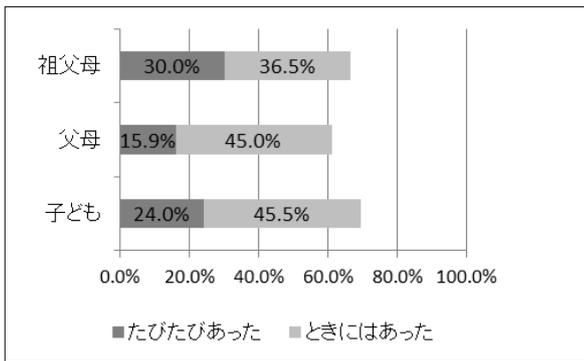
グラフで示すと傾向が鮮明に見える。祖父母、父母、子どもの回答が横棒グラフで「く」の字型になる。父母世代が親を見習う傾向が他よりも低いのである。「よくあった」だけを比較すると、父母世代の回答は半減する。いずれも2000年調査と同じであった(選択肢の表現がいくらか異なるが、趣旨は同じである)。

(図11) 父親を見習おうと思ったか (2000年調査)



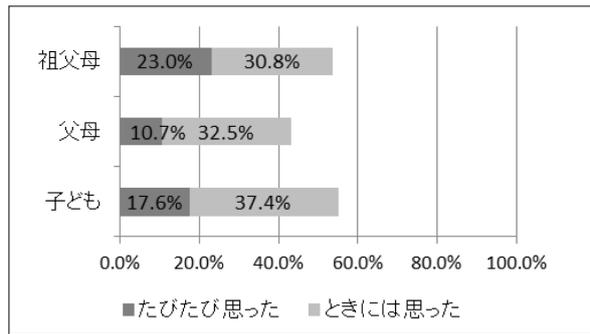
(祖父母 363、父母 2200、子ども 1341)

(図12) 母親を見習おうと思ったか (2000年調査)



(祖父母 414、父母 2277、子ども 1364)

(図14) 親になったら自分の親のようになりたかったか (2000年調査、同上)



(祖父母 409、父母 2244、子ども 1351)

2000年調査でも「く」の字型である。祖父母世代から父母世代で低下し、子ども世代で復活していることがわかる。この傾向はつぎの質問でも同じである。

〈祖父母、父母、子どもへの質問〉

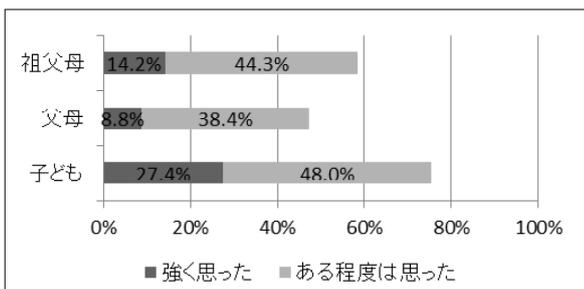
「あなたは、小・中学生の頃、自分が母親になったら自分の母親のようになりたかったか (男性は父親) 1. 強く思った 2. ある程度は思った 3. あまり思わなかった 4. まったく思わなかった 5. その他」

(表9) 親になったら自分の親のようになりたかったか (男性は父、女性は母に対して)

	1. 強く思った	2. ある程度は思った	3. あまり思わなかった	4. まったく思わなかった	総数
祖父母	14.2%	44.3%	33.5%	5.7%	176
父母	8.8%	38.4%	34.1%	15.6%	513
子ども	27.4%	48.0%	16.2%	7.6%	394

(5. その他は省略)

(図13) 親になったら自分の親のようになりたかったか (同上)



これもまた「く」の字である。2000年の結果も同じである。

「親を見習おうと思ったか」または「親のようになりたかったか」との質問に対する結果は、親に対する信頼感をあらわす。モデルになるということは信頼感のあらわれである。現在の祖父母世代が現役の親だった頃よりも、いまの父母世代のほうが子どもからの信頼感が増していることがわかる。

今回の調査も含め、なぜ祖父母世代への信頼感が低いのか？

2000年調査のときの平均年齢は、父親44.2歳、母親41.3歳、祖父70.0歳、祖母68.8歳であった。そのときの父母世代の両親(祖父母世代)はおおよそ昭和初期の生まれであったといえる。戦前の日本文化にたっぴりとつかった人々で、国家主義/家父長主義的な精神性が培われていたはずである。ところが、その子ども世代(すなわち、2000年の父母世代)は、おおむね昭和30年代生まれで、戦後の個人主義/民主主義の思想が浸透した時代に育った世代である。したがって、戦前生まれの親の行動を見習うことに否定的な傾向が発生したといえるのではないかと。

今回の調査での平均年齢は、父親43.6歳、母親41.6歳、祖父71.4歳、祖母67.3歳である。したがって、父母世代の両親はおおむね戦前と戦後のはざまに生まれたといえよう。戦後思想が十分に浸透しているとはいえない時代の文化の中で生きてきたわけである。昭和45年(1970年)前後

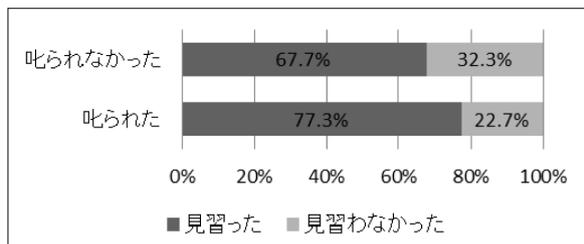
に生まれた父母世代とは大きくちがう。つまり、背景の時代文化がかなり異なる人々の間では、上の世代を下の世代がたやすく見習うとはいかないのである。

祖父母世代がその上の世代（明治生まれの両親）を見習う度合いと、子ども世代が父母世代を見習う度合いがほとんど似ているのは、おそらく同じ文化のなかで育っているからであろう。文化は家庭の中にも浸透してくる。同じ文化を互いに共有するかどうかは、親子の間であっても互いに認めあうかどうかにかいがいをもたらす、といえよう。つぎの項目でもそれがいえる。

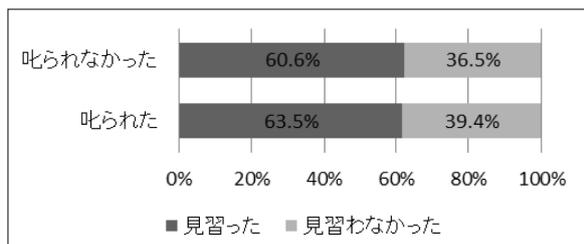
#### (4) 子どもは親のどこを見ているか

つぎに、親が子どもを「叱る」または「ほめる」ことと、子どもが親を「見習う」ことの関係について示したのが下のグラフである。

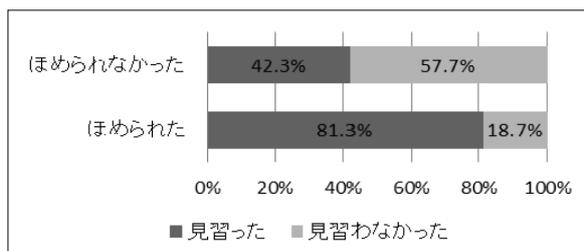
(図 15) 「叱られる」と信頼（小中学生）



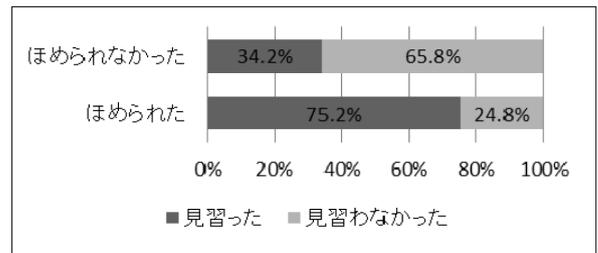
(図 16) 「叱られる」と信頼（父母）



(図 17) 「ほめられる」と信頼（小中学生）



(図 18) 「ほめられる」と信頼（父母）



「叱られること」と「親を見習う」との関係については相関性がほとんどない。ところが、「ほめられる」ことと「見習う」こととの間には、相関性がきれいに見える。「ほめられた」経験をもつほうが「見習う」傾向が強く表れている。「ほめる」行為が信頼感を高めることにつながるものといえる。図表は省略するが、2000年調査でも同じである。

#### (5) 家庭におけるしつけの実態に関するポイント

① 近年においても生活指導等の場面でよく話題となる「家庭の教育力の低下」は、本調査に基づけば根拠に乏しく、むしろ世論とは逆の実態が明らかになった。

② 現在の親（父母世代）は、祖父母世代よりも「叱る」、「ほめる」という行為を頻繁におこなっており、「しつけ」に対して積極的である。さらに、子どもからの信頼感も増しており、「ほめる」親ほどその傾向が強く表れている。

③ 本章に示したすべての質問項目において、2000年調査と同様の傾向にあり、本研究における調査仮説の妥当性が証明された。

(高林、桜井)

### Ⅲ 家庭におけるしつけの実態と学校教師の実態認識とのズレ

本章では、家庭におけるしつけの実態と学校教師の実態認識とのズレを明らかにしていく。

#### (1) 親が子どもを「叱る」ことについての教師の認識

〈父母、祖父母への質問〉

「あなたは、自分の子どもを（幼児期から14歳あたりまでの間で）叱ることがありましたか？

1. よく叱った
2. ときどき叱った
3. あまり叱らなかった
4. まったく叱らなかった
5. その他」

つぎの表は表3と同じである（順番はちがえてある）。

(表10) 親が子どもを「叱る」ことについての家庭の実態

	1. よく叱った	2. ときどき叱った	3. あまり叱らなかった	4. まったく叱らなかった	実数
父親	23.4%	58.2%	15.6%	2.8%	218
母親	49.3%	44.2%	4.8%	1.0%	294
祖父	5.3%	47.4%	42.1%	3.9%	76
祖母	21.8%	54.4%	20.8%	1.0%	101

(5.その他は省略)

〈教師への質問〉

「いま担当している児童生徒の親は、全体的な傾向として、子どもをよく叱っていると思いますか？

1. よく叱っている（叱った）と思う
2. ときどき叱っている（叱った）と思う
3. あまり叱らない（叱らなかった）と思う
4. まったく叱らない（叱らなかった）と思う
5. その他」(カッコ内は祖父母についての同じ内容の質問)

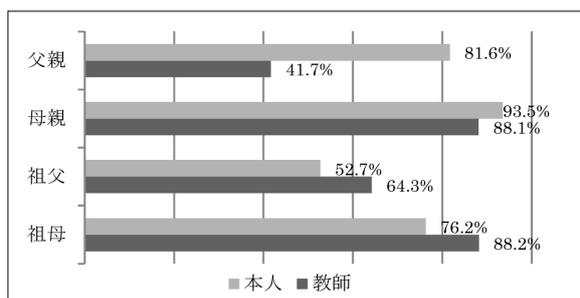
(表11) 親が子どもを「叱る」ことについての教師の認識

	1. よく叱っている（叱った）と思う	2. ときどき叱っている（叱った）と思う	3. あまり叱らない（叱らなかった）と思う	4. まったく叱らない（叱らなかった）と思う	実数
父親	3.6%	38.1%	55.9%	1.2%	85
母親	45.2%	42.9%	10.7%	0.0%	
祖父	19.0%	45.3%	33.3%	1.2%	
祖母	48.2%	40.0%	10.6%	1.2%	

(5.その他は省略)

上記表中の1と2（父母および祖父母は「よく叱った+ときどき叱った」、教師は「よく叱ったと思う+ときどき叱ったと思う」）を合計して、家庭での実態と教師の認識を比較してみたのが次のグラフである。

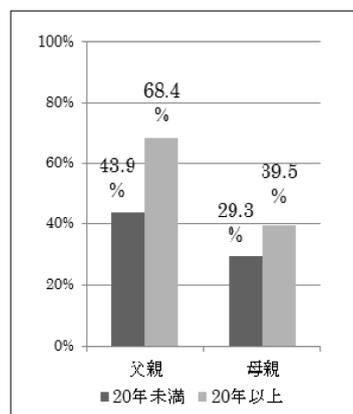
(図19) 親が子どもを「叱る」ことについての家庭の実態と教師の認識



総体的に、家庭の実態と教師の実態認識との間にはズレがある。父母は教師が思うよりも叱っており、祖父母は教師が思うよりは叱る度合いが低い。顕著なのは、現在の父親に対する教師の認識である。実態の半分しかない。「いまの父親は子どもを叱らない」と見ているのだろうが、実際とあまりにもかけ離れている。

また、逆に現在の父母が「子どもを叱らない」と考えている教師がどのくらいなのか、その割合を見てみる。

(図20) 現在の父母が「子どもを叱らない」と考えている教師の割合（教職経験年数による比較。20年未満41人、20年以上40人である。以下同様）



現在担当している児童生徒の父母が「子どもを叱っていない（あまり叱っていない+まったく叱っていない）」と考えている教師は全体の55.7%であり、教員としての経験年数が長いほどその傾向が強く見られる。とくに父親については、その傾向が顕著に表れている。

つぎに、子どもを叱る理由別のデータからそのズレを示しておく。

この表は、各項目について、父母の実態（よく叱る＋ときどき叱る）と教師の認識（よく叱ると思う＋ときどき叱ると思う）とのズレを示したものである。

(表12) 子どもを叱る理由別に見た、家庭の実態と教師の認識とのズレ

子どもを「叱る」理由	父母	教師	差（父母－教師）
言葉遣いが悪いと	95.8%	68.2%	27.6
電車などでさわがしくすると	97.0%	72.7%	24.3
遊んで散らかしたままだと	96.7%	83.3%	13.4
人をバカにすると	98.4%	86.1%	12.3
宿題をやらないと	87.8%	91.0%	- 3.2
友だちなどを叩いたりすると	96.8%	95.4%	1.4
わがままを言うと	95.2%	95.5%	- 0.3
ウソをついたのがバレると	98.7%	98.5%	0.2

とくに差が大きかったのは、上から4つの項目である。これは、教師がいま担当している児童生徒を見て「しっかりとできていない」と感じる内容であるといえる。私（高林）の経験から見ても、そういえる。「言葉づかい」や「公共の場所におけるマナー」等については実態と認識のズレが大きく、教師たちが指導に苦慮しているようすが見てとれる。

逆に、下から3つの項目ではほとんど差が見られず、「暴力的な行為」や「わがまま」、「ウソ」については、父母は家庭で「叱っている」と教師は認識している。

## (2) 親が子どもを「ほめる」ことについての教師の認識

〈父母、祖父母への質問〉

「あなたは、自分の子どもを（幼児期から14歳あたりまでの間で）何かでほめたということがありましたか？ 1.よくほめた 2.ときどきほめた 3.あまりほめなかった 4.まったくほめなかった 5.その他」

つぎの表は表6と同じである（順番はちがえている）。

(表13) 親が子どもを「ほめる」ことについての家庭の実態

	1.よくほめた	2.ときどきほめた	3.あまりほめなかった	4.まったくほめなかった	実数
父親	28.0%	60.0%	11.5%	0.0%	218
母親	47.4%	48.2%	3.8%	0.3%	289
祖父	12.5%	72.2%	13.9%	1.4%	72
祖母	30.0%	58.0%	10.0%	1.0%	100

(5.その他は省略)

〈教師への質問〉

「いま担当している児童生徒の親は、全体的な傾向として、子どもをよくほめていると思いますか？ 1.よくほめている（ほめた）と思う 2.ときどきほめている（ほめた）と思う 3.あまりほめない（ほめなかった）と思う 4.まったくほめない（ほめなかった）と思う 5.その他」  
(カッコ内は祖父母についての同じ内容の質問)

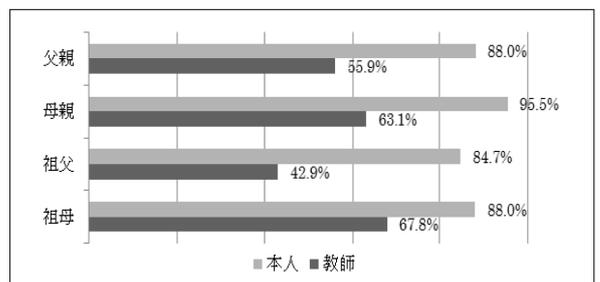
(表14) 親が子どもを「ほめる」ことについての教師の認識

	1.よくほめている（ほめた）と思う	2.ときどきほめている（ほめた）と思う	3.あまりほめない（ほめなかった）と思う	4.まったくほめない（ほめなかった）と思う	実数
父親	2.4%	53.5%	41.7%	1.2%	85
母親	3.6%	59.5%	34.5%	1.2%	
祖父	3.6%	39.3%	52.3%	3.6%	
祖母	6.0%	61.8%	31.0%	0.0%	

(5.その他は省略)

上記の1と2（父母および祖父母は「よくほめた＋ときどきほめた」、教師は「よくほめている（ほめた）と思う＋ときどきほめている（ほめた）と思う」）を合計して、家庭での実態と教師の認識を比較してみたのが下のグラフである。

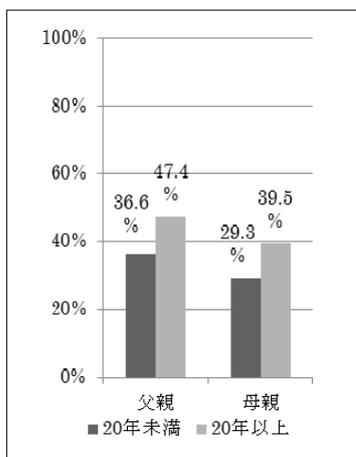
(図21) 親が子どもを「ほめる」ことに対する家庭の実態と教師の認識



教師の認識と父母の実態との差は約3割、祖父が4割、祖母は2割と大きなズレが明らかになった。現在の父母も祖父母世代も教師が思っている以上に家庭で子どもをほめている（ほめていた）ことがわかる。

また、現在の父母が「子どもをほめていない」と考えている教師の割合を教職経験年数によって比較してみると、つぎのグラフになる。

(図22) 現在の父母が「子どもをほめない」と考えている教師の割合（教職経験年数による比較）



現在担当している児童生徒の父母が「子どもをほめていない（あまりほめていない+まったくほめていない）」と考えている教師は全体の42.2%であり、「叱らない」の場合と同様、教員としての経験年数が長いほどその傾向が強く見られる。

### (3) 親のしつけは「子どもの気持ち」と「社会的常識」のどちらが優先か

〈父母、祖父母への質問〉

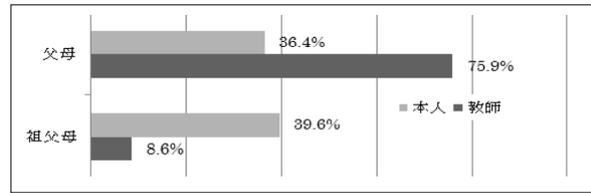
「あなたは、子ども自身の気持ちと社会的な常識とのどちらを優先させて子どもを育てていますか？ 1. 子どもの気持ちがかかなり優先 2. 社会的な常識がかかなり優先 3. 子どもの気持ちがかやや優先 4. 社会的な常識がかやや優先 5. どちらともいえない 6. その他」

〈教師への質問〉

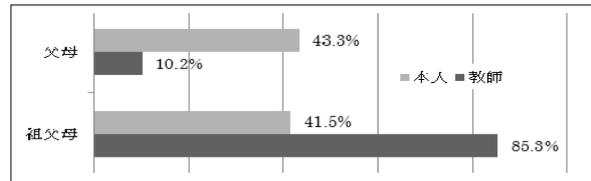
「現在の児童生徒の親は、子ども自身の気持ち

と社会的な常識とのどちらを優先させて子どもをしつけていると思いますか？（選択肢は同上）」

(図23) 「子ども自身の気持ち」が優先



(図24) 「社会的な常識」が優先



教師は、いまの父母は「子ども自身の気持ち」を優先させた子育てをしており、祖父母世代は「社会的な常識」を優先して子育てをしていたとの認識を強くもっているが、これについても実態はまったく逆であり、その差も3割から4割と非常に大きい。

### (4) ズレの原因

これらのズレはなぜ生ずるのか？

教師への問いは、「最近の親についてどう思うか？ 昔の親はどうであったと思うか？」という印象を尋ねているのである。したがって、どうしても印象批評になってしまう。すなわち、「いまの子どもはモラル等々でよくないところが目立ち、昔の子どもはその点はちゃんとしていた」という大雑把な判定から父母と祖父母のしつけ力を批評する、という方向になりがちになる。あるいは、父母と祖父母についての卑近な具体例を代表例に位置づけて全体を想定しがちになる。いずれも、「最近の親はダメだ」という観念が先入主となって、それに引きずられ、冷静な鑑識眼を喪失している、といえる。

典型例は図23と図24だ。子どもをしつけるときに「子ども自身の気持ち」と「社会的な常識」のどちらを優先しているかについては、どちらも

実際の父母と祖父母の回答にはほとんど差がないのに、教師はどちらも8倍以上の差をつけているのである（「子どもの気持ち優先」と思う＝父母75.9%：祖父母8.6%、「社会常識優先」と思う＝父母10.2%：祖父母85.3%）。「いまの子どもがよくないのは、子どもの気持ちにつきあって甘やかしているからだ。昔の子どもがちゃんとしていたのは、社会の力が親を通じて家庭の中に浸透していたからだ」とでも思っているのかもしれない。先入観の驚くべき作用である、といわざるをえない。

「いまの子どもはおしなべて昔よりもモラル等々の面でよくなってきている」とはほんとうか。かならずしもそうとはいえない。戦前および戦後しばらくの間の日本人の道徳観や少年の犯罪史を調べてみればわかることである（たとえば、広田照幸『日本人のしつけは衰退したか』講談社現代新書、赤塚行雄編『青少年非行・犯罪史資料』刊々堂出版、山本健治編著『年表 子どもの事件1945～1989』拓殖書房を参照されたい）。

いまここでその話に進むことは避ける。論旨が異なるからである。ただし、子どもの行動が家庭におけるしつけの強弱だけを反映しているとはいえない、ということは述べておく。とくに最近の子どもの行動は家庭を離れたところからの影響はかなりあるようだ。

2003年に長田が「少年の世界—その世代間比較調査—」をおこなっている（2003年日本教育学会発表。2006年長田前掲論文または長田「世代間比較調査『少年の世界』—友人関係意識の現状と学校教育の課題—」宇都宮大学教育学部附属教育実践総合センター紀要第30号2007年所収、あるいは、長田他「現代の子どもの友人関係における特質—序論—」小池学園研究紀要第11号2013年を参照されたい）。それによると、いまの子どもは父母や祖父母の子ども時代よりも「友人関係にナーバスになっている」という。

たとえば、「そばに来ないでほしい、とあなた

がいつも思う人は誰かいますか（いましたか）」という問いについて、「自分をいじめる人」を選択しているのは、祖父母世代（子ども時代）1050人中の14.2%、父母世代（同）4976人中の15.3%、子ども世代2477人中の14.8%で、三世代ともほとんど同じだが、「友だちの誰か」を選択しているのは、祖父母世代7.7%、父母世代9.9%に対して、子ども世代は21.6%と突出的に多いのである。これについて長田はつぎのようにいう。

「そばに来ないで」というのは、「つきあい」への拒否感である。その拒否感を何らかの形で相手に示しうるなら、友人関係が選択的になる。「この人とはつきあうが、この人とはつきあわない」という関係がある程度は確立される。そうすると、「友だちづきあいがいや」という受け身の心理も生まれない。そもそも、「そばに来ないで」という気持ちも働かない。つまり、自律心（自分は自分だ、という精神性）の問題である。

自律的であればあるほど、まわりは気にならない。子どもが何十何百もいる教室・学校という空間でも、選択的でいられるから、他者との心理的な距離をコントロールしうる。学校の中で友人関係に意識がとられることもない。他者とは適度に距離をおくこともできる。そういう視野から見ると、現子ども世代は自律心が脆弱な状態ではないか、と見えてくる。（前掲、小池学園研究紀要 p.71）

自律心が弱ければ、友だちにどう思われているかが気になる。同じ調査で「何かをするとき、友だちにどう思われるか、ということが気になりますか」と尋ねると、「たいてい気になる+気になるほうが多い」は、年齢別の集計ではあるが、祖父母60代508人中20.3%、父母40代2612人中28.5%に対して、高校2年生922人中49.9%、中学2年生687人中43.1%となっている（同上、p.71）。他人の視線を気にするのは日本人の特性だと思われるところがあるが、現在の子どもの半

数近くが友人関係においてそういう状態になっているのだ。

つまり、子どもには家庭から離れた子どもだけの世界があり、その中でまわりから浮かぬような行動を余儀なくされるのである。これはいつの時代でもある程度は同じであろうが、最近の子どもを取り巻く事情は深刻であるようだ。

教師の目がそういうところにも向けられるなら、親の家庭内でのしつけ状況を見る目も広がる。子どもを日々見ながら親のしつけ内容を想念することであろうが、子どものよくない面を親のしつけの悪さに直結させる単眼性（ことがらの多面性／重層性に目が向かない傾向）と、昔の子どもがよかったのは親のしつけがよかったからだと思う偏狭性（バイアスのかかった思考回路に埋没する傾向）とがあっては、子どもの現状と親のしつけの現状とを冷静に見ることはむずかしくなる。それが、家庭のしつけの実態と教師の実態認識との間にかなりのズレを生んだ原因ではないか。

#### （５）本調査で明らかになった家庭におけるしつけの実態と学校教師の実態認識のズレのポイント

① 学校の教師が考えている以上に、現在の親は子どもを叱ったり、ほめたりしている。逆に、祖父母世代が子ども（いまの父母世代）を育てていた頃は、教師が考えるほど叱ったり、ほめたりしてはいない。

② 上記①の中でも、とくに現在の父親に対する認識のズレが大きく、「叱る」については約４割、「ほめる」については約３割の差が見られる。学校教師は家庭における父親の役割について、実態とかけ離れた認識を強くもっているものといえる。

③ 「叱る」内容については、「言葉づかい」、「電車の中でさわぐ」、「遊んで散らかしたまま」、「人をバカにする」の４項目において、実態と実態認識との差が大きく、教師は「マナーやモラル」に関するしつけが家庭において弱くなっていると感じている。

④ 親がしつけにおいて「子どもの気持ち」と「社会的常識」のどちらを優先させるかについても、教師は父母、祖父母のどちらに対しても実態とは逆の認識をもっている。

#### （６）まとめ

平成 22 年 3 月に出された文部科学省の「生徒指導提要」には、生徒指導における家庭との連携の重要性や家庭との協力関係を築くため、それぞれの家庭環境に対する理解の必要性が示されている。

ところが、小中学校の校長を対象とした調査（金子元久 2006.08.29 基礎学力シンポジウム資料「学力問題と学校」）によると、20 年前よりも家庭の教育力が下がったと考えている校長は小中ともに約 9 割に上る。また、同調査によると「家庭での基本的なしつけの欠如」が深刻であると考えている校長も約 9 割である。こうした状況で本当に学校と家庭との協力関係は築けるのだろうか。また、この認識には根拠があるといえるのであろうか、というのが本研究の課題意識のひとつであった。

2000 年調査では、当時盛んであった「家庭の教育力は低下した」との世論とは逆の実態が明らかになった。今回はその追試とともに学校教師の実態認識に関する調査をおこない、そのズレを明らかにすることを試みた。結果は、本資料に示したとおり、「家庭のしつけの実態と学校教師の実態認識にはズレがあり、そのズレもかなり大きなものである」ことが明らかになった。

この結果から、教師の家庭のしつけに対する認識が正しくないまま（家庭ではしつけができていないという思い込みを前提として）保護者対応をおこなうために、その間でトラブルが発生したり、小さなトラブルが増幅したりすることも考えられる。学校（教師）と家庭（保護者）が協力関係を築くためには、両者が実態を正しく認識した上で生徒指導に対応することが必要である。

（高林）

アンケート調査票：【母親用】を代表で示す（父親用、祖父用、祖母用も同じ。女性、男性のちがいが質問にある場合は、相応に直してある。小中学生用は、おとな用の問8までと同じ。教師用については後述）。答え方の説明は略す。なお、現物はここに示した体裁とは異なる。

問1 あなたは、子どもの頃（幼児期から14歳あたりまでの間で）、親によく叱られましたか。おこられた、きびしく注意された、というようなことがあったかどうかで考えてください。

①父親には……？ 1よく叱られた、2ときどきは叱られた、3あまり叱られなかった、4まったく叱られなかった、5その他

②母親には……？（同）

問2 父親か母親に叱られたことがあるという人だけにおたずねします。あなたは、子どもの頃（幼児期から14歳あたりまでの間で）、どのようなことで父親または母親に叱られましたか。下表内の①、②、③、……の項目ごとに、そういうことをやって親に知れるとどうであったか、当てはまる番号にそれぞれ一つ○をつけてください（ここでは、父親・母親の区別をしません）。また、①、②、③、……に書かれていることがら自体を自分はやったことがない（やった記憶がない）、という場合は「4経験がない」の欄の4に○をつけてください。

①言葉づかいが悪いと…？（1叱られた、2叱られたり叱られなかったりした、3叱られなかった、4経験がない、5その他）

②わがままを言うと…？（同上）

③人をバカにすると…？（同上）

④宿題をやらないと…？（同上）

⑤友だちなどをたたいたりすると…？（同上）

⑥電車などでさわがしくすると…？（同上）

⑦ウソをついたのがバレると…？（同上）

⑧遊んで散らかしたままだと…？（同上）

問3 父親か母親に叱られたことのある人だけにおたずねします。叱られたとき、どういう言葉で叱られることが多かったでしょうか。父親、母親ごとに、次の1～10のうちから、あなたがよく受けた叱り方を三つまで（一つか二つだけでもいい）選んで、回答欄のカッコ内に番号を記入してください（父親か母親のどちらかには叱られなかった場合は、そのどちらかについてはカッコ内に何も記入しないでください）。

回答欄 父親から（ ） 母親から（ ）

1「言うことを聞け！」「家から出ていけ！」など、親の命令にしたがわせる叱り方

2「みっともない」「人に笑われるぞ！」など、人の目をもちだす叱り方

3「△年生にもなって！」「お兄ちゃんでしょ！」など、年齢や立場をもちだす叱り方

4「△△におこられるよ！」など、こわそうな人をもちだす叱り方

5「がまんしろ！」「泣くな！」など、子どもにがまんを求める叱り方

6「△△ちゃんを見てごらん！」「みんなはできるぞ」など、他人とくらべる叱り方

7「社会に出て通用しないぞ！」「いつか困るぞ！」など、子どもの将来を問題にする叱り方

8「もっと素直になりなさい！」「思いやりが足りない！」など、子どもの性格を問題にする叱り方

9「自分も同じことをされたらイヤでしょ！」など、人の気持ちに目を向かせる叱り方

10「子どもとはいえ……」「人というのは……」「勇気とは……」など、正しいやり方を示す叱り方

問4 あなたは、子どもの頃（幼児期から14歳あたりまでの間で）、親から何かでほめられたことがありましたか。

①父親からは…？ 1よくほめられた、2ときどきほめられた、3あまりほめられなかった、4まったくほめられなかった、5その他

②母親からは…？（同）

- 問5 上の問4で、1、2のどれかに○をつけた人だけにおたずねします。どんなことでほめられましたか。次のうちからいくつでも選んで○をつけてください。  
1 学業成績、2 絵、歌、スポーツなどの上手さ、3 家の手伝い、4 礼儀正しさ、5 活発さ、がまん強さ、6 勇気、正義感、7 親切、思いやり、8 容姿のかわいさ、9 その他
- 問6 あなたは、小・中学生の頃、親を見習った（あるいは、見習おうと思った）ということがありますか。  
① 父親については……？ 1 よくあった、2 ときどきあった、3 あまりなかった、4 まったくなかった、5 その他  
② 母親については……？（同）
- 問7 あなたは、小・中学生の頃、何か悩みをかかえ、自分で考えていてもなかなか解決できそうになかったとき、だれに相談することが多かったでしょうか。次のうちからいくつでも○をつけてください。  
1 父親、2 母親、3 おじいさん、4 おばあさん、5 兄弟姉妹、6 友人、7 学校の先生、8 その他の人（ ）、9 一人で解決していた、10 そういう悩みはなかった
- 問8 あなたは、小・中学生の頃、自分が母親になったら自分の母親のようになりたいと思ったことはありますか。  
1 つよく思った、2 ある程度は思った、3 あまり思わなかった、4 まったく思わなかった、5 その他（ ）
- 問9 あなたは、自分の子どもを（幼児期から14歳あたりまでの間で）叱ることがありましたか。  
1 よく叱る、2 ときどき叱る、3 あまり叱らない、4 まったく叱らない、5 その他（ ）
- 問10 前の問9で、1、2のどれかに○をつけた人だけにおたずねします。あなたは、自分の子どもを（幼児期から14歳あたりまでの間で）どのようなことで叱りましたか。下表の①、②、③、……の項目ごとに、そういうことを子どもがやったことに気づいたときどうであったか、当てはまる番号にそれぞれ一つ○をつけてください。  
①、②、③、……に書かれていることから自体を子どもがやったことがない（やった記憶がない）という場合は、「4 経験がない」の欄の4に○をつけてください。  
（項目は、問2に同じ）
- 問11 前の問9で、1、2のどれかに○をつけた人だけにおたずねします。叱るときどういう言葉で叱ることが多かったでしょうか。次の1～10の中から三つまで（一つか二つだけでもいい）○をつけてください。  
（選択肢は問3に同じ）
- 問12 あなたは、自分の子どもを（幼児期から14歳あたりまで）何かでほめたということがありますか。  
1 よくある、2 ときどきはある、3 あまりない、4 まったくない、5 その他（ ）
- 問13 上の問12で、1、2のどれかに○をつけた人だけにおたずねします。どんなことでほめましたか。次のうちからいくつでも選んで○をつけてください。  
（選択肢は問5に同じ）
- 問14 あなたは、子ども自身の気持ちと社会的な常識とのどちらを優先させて子どもを育てていますか。  
1 子どもの気持ちがかなり優先、2 社会的な常識がかなり優先、3 子どもの気持ちやや優先、4 社会的な常識がやや優先、5 どちらともいえない、6 その他（ ）
- 問15 あなたは、自分の子どものしつけについて学校（教師）を頼りにしていますか。  
1 かなり頼りにしている、2 ある程度は頼りにしている、3 あまり頼りにはしていない、4 頼りにしようと考えたことはない、5 その他（ ）
- 問16 あなた自身のことについておたずねします。年齢（ ）歳 ← 数字を記入してください。
- 問17 あなたが、小・中学生の頃、父親や母親について何かとくに思っていたことがあれば、何でもいいので、下の枠の中に自由に書いてください。（枠、略）

【教師用】 父母祖父母用の問9、問10、問12、問14について父母世代と祖父母世代を別々に問い、問7（児童生徒の悩み相談相手）と年齢および勤務年数の問いが加わっている。ただし、表現はつぎのようになっている。「いま担当している児童の親は、全体的な傾向として、子どもをよく叱っている、と思いますか」「どのようなことがらについて親は子どもを叱っていると思いますか。想像でけっこうです」（他、同様）。

長田 勇 （埼玉東萌短期大学教授）

前嶋 元 （埼玉東萌短期大学講師）

高林直人 （静岡県立袋井商業高校教諭）

桜井 誠 （三重大学大学院生）